

7/25 マタイの福音書 5章 42-48節「天の父の子どもとなるため」

小池 宏明 牧師

主イエス様は、「自分の敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。」(5:44)と言われる。これは人の感情から大きく外れた教えである。前の43節で、イエス様は『あなたの隣人を愛し、あなたの敵を憎め』と言われていたのを、あなたがたは聞いています。」と語り、その反対命題を44節で示された。当時のユダヤ人の指導者たちは、「隣人を愛せよ」(レビ 19:18)と言う命令は、「隣り人」が「近い人」という意味であるため、同じユダヤ人同士の間で適応し、外国人は「隣り人には当たらない」と解釈していた。それで「外国人は隣り人ではないから憎んでいい」と、教えていたのだ。そして、残念なことに、他人を区別したり、差別したりすることは、いつの時代でも、世界中で、日常的に行われている。

* 区別や差別の壁を越える自由

敵を愛し、迫害者のためにとりなすことは「天におられるあなたがたの父の子どもになるためです。」(45節)では、父なる神様はどのようなお方だろうか。主は続いて「父はご自分の太陽を悪人にも善人にも昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからです。」と語られた。

決して分け隔てをなさらないお方が、私たちの父なる神様なのだ。主は仲間と敵を区別されない。イエス様がここで「敵」という言葉が使われたのは、ユダヤ人の間で「敵を憎め」という言葉があったのでその反対を伝えるためなのだ。

私たち人間は、さまざまな壁を作って不自由に生きている。しかし、父なる神様は自由に、ご自分の太陽を、区別や差別なく、誰の上にもでも照らすことができる(46、47節)ように私たち一人ひとりを愛しておられる。私たちも「天の父」の「子ども」として敵を作り出すことから自由になれるのだ。損得を越えた自由を求めて生きることができる。

* 何よりも祈ることから

私たちが「敵」だと思い込んでいる人々を愛するために、具体的にどのような実践ができるだろうか？何よりも、祈ることから始めよう。名前を挙げて、とりなし祈る。彼らの祝福を祈る。私たちキリスト者はすべての人のために分け隔てなく祈る自由が与えられているのだ。例え、愛せなくても、祝福を祈ることができなくても、名前さえ口に出したくない相手の名前を挙げて「〇〇さんのことを愛することができません。許すことができません。こんな私を憐れんでください」と祈ってみよう。祈ることから変化が始まるのだ。